

付録 果菜園荒地年報二〇一六

今年もこの年報は、地球気象の局所での報告という側面をまぬがれない。二年続けて長雨が果樹の成長を妨げたが、今年は春に、去年ピークになったエルニーニョ現象は夏までに収束するだろうという長期予報が出た。園丁は期待を抱いて天候の推移を見守った。

芽吹きのあるところになると、去年の不順な天候が後遺症を残していることが明らかになった。重体のレモンは二十枚足らずの葉しか復活せず、カビに痛められた西条柿も多くの葉の葉が枯れた。ほかの木はなんとか順に花を開き新しい葉を出したので、よい天気にも恵まれさえずれば……。けれども、夏までの気温の推移はどこかおかしくて、体力不足の果樹の回復を阻んだ。枇杷の花房は生育せず結局五月中に姿を消した。李・梨・林檎の実つきが悪い。サクランボは去年よりも数が多かったが実の熟し方がきれいでない。ブドウは、ピオーネが初めて房をつけたものの、三株合わせても房の数が少ない。ミカン・ハッサク・ポンカンはそれぞれ一つないし三つ実を残したのをよしとしなければならない。ないないづくしだけれども、梅は梅干しにできる程度生った。

今年も、梨につく赤星病退治の薬剤を変えてみたら劇的に効果があつて、三株の木は初

めてまともに葉を茂らせた。この薬剤は細菌の細胞膜を破壊する効果があるようだ。怖い薬があるものだ。李の実は一箇だけつかなかった。それは、ちゃんとしたやり方で花粉を採集し人工授粉しないせいかもしれない。しかし、成熟した二箇のスモモは、三十年前に両親が植えてから初めて園丁が口にできたのだから、今年の年報の特記事項である。そして、去年の秋に植えた二株の桃が、それぞれ小さいが甘みのある実を五箇献呈してくれて喜びを添えた。花だけは美しく咲かせる若木のアーモンドは、一つだけ実を残したが成熟する前に落果。拾ってみたなら、中からたしかにアーモンドの実だということを示すかけらがとれた。売られているアーモンドの実がどういうものか学習したわけである。もう一つ園丁の苦勞をなぐさめてくれることがあった、初めてグミが生ったのだ。

お天道様は今年の八月も園丁に試練をくださった。一か月間雨が降らず、小さなリヤカーで水を運んで果樹と野菜に水やり。今年も、二株のイチジクの一つが葉を落としてしまい、秋の実は緑から茶色に変わった。果樹の多くは、夏までの天候が体調を回復させず、八月の早が応えたのだろう、実が小ぶりで生育も遅かった。ナシは、落ちずに実が残ったのは若木の一株だけ、四個。リングゴは一番大きな一株に八個ぐらい。去年は長雨で八月に多くの実を落としたクリは、今年は渴きで同じ憂き目に。上天気はブドウには向いていた

のに、虫のせいだろう初夏に葉は穴のあいた状態になり、房についた少ない実は十分な栄養分をとることができなかった。袋の中はよって知るべし。柑橘類も日焼けして八月に黄色味をおびた実が出る始末。西条柿はたった一つ。甘柿だけが長く生って氣勢を上げた。

野菜は主に園丁のパートナーが世話をするのだが、まあ、ほどほどに収穫できた。イチゴの株を増やしたので、ダンゴムシやナメクジよりもたくさん食べることもできた。スイカも三株に増やして去年よりも数が多く、中には十キログラムぐらいのがあった。だが、順調に育っていたメロンが大きくならうとするころに葉がみな枯れたから、やっぱり天候はおかしかったのだろう。

レモンの木は秋には枯死し、根本を鋸で引いて引導を渡した。根株を抜くのがたいへんだらうと思っていたら、あっさり抜けた。細い根がほとんどない。病気の原因を考え直してみる必要がある。あとには杏を植えて隣にある李の受粉樹にすることにした。ただし、憂うべき温暖化のせいで杏にはこのあたりの天候は苛酷らしいので、実よりもその花を愛でることで満足しよう。さて、秋の終わるころ、希望を抱かせることを見つけた。中国から持ち帰った枇杷の種を二個植えて七年育てたかいがあって、二株とも花を咲かせ始めた

のだ。無事成熟して黄色い琵琶になるのを待とう。

二〇一六年冬至

じつは、もっと熟れるのを待っている柑橘類が残してある。家から遠いところにある耕作放棄地のデコポンは、世話の足りないのを抗議するように、二十個近く実をつけた。その十数個と、ハッサク・ポンカン合わせて三個は、年末に帰ってくる孫といっしょに食べるつもり。